

18th WFOT Congress 2022に参加して

西九州大学リハビリテーション学部 リハビリテーション学科 作業療法学専攻 松尾 萌美

I. はじめに

2022年8月28日～31日に、フランスのパリで第18回の世界作業療法士連盟（World Federation of Occupational Therapists; WFOT）主催の国際学会が開催された。WFOT主催の国際学会は4年に一度の頻度で世界各国どこかの国で開催される、いわば作業療法士にとってのオリンピックのような学会である。今回の学会では、100か国以上から2500人を超える代表者、60か国以上からの演者、世界中からのスポンサーが集まり、研究と実践の多くの経験を共有するグローバルな場となったことがWFOTより報告されている¹⁾。

本学会が、コロナ禍後に開催された、初めてのWFOT学会であることは言うまでもない。日本を含め、コロナ禍収束の目途が立たない国が多々ある中、対面参加を推奨したWFOT学会組織人の苦慮や開催を成功させるための苦労は計り知れない。筆者は、本学会への参加および発表という貴重な経験を頂戴したため、今回経験したことについて、以下に述べる。

II. コロナ禍による学会への影響

本学会は、元々2022年の3月末に開催される予定であった。演題登録締め切りも2020年末～2021年初旬であり、当時は2022年頃にはコロナ禍が収束し、通常通り海外渡航が可能になっているだろうと予想していた。しかし、コロナ禍は収束するどころか、次々と新しい変異株の発生により、我々の生活はコロナ禍を脱出できないままとなった。国内外の学会の中止が相次ぎ、オンライン対応が迫られる中、WFOT学会ではハイブリッド開催かつ開催時期延期という措置が講じられた。ハイブリッド開催ではあるが、開催時期を延期したのはできるだけ多くの参加者が対面で参加することを促すためだったようだ。私自身、対面で参加することに対して迷いはあったが、発表する機会を頂戴したことにより、思い切ってパリに足を運んだ。

フランスに入国する際の制約としては、ワクチン接種を3回終了していれば特に何もなく、日本に帰国す

る際の制約としては、ワクチン接種を3回終了している場合はフランスを出国する前72時間以内のPCR検査の陰性証明書を取得することであった。



図1 シャルルドゴール空港に置いてあったWFOT学会のウェルカムパネル

まず、フランスのシャルルドゴール空港に到着し入国審査を通過するとすぐに目についたのが図1（写真）である。

図1を見ると、まるでフランス全土を挙げて外国人作業療法士の入国を歓迎してくれているような感じがし、海外渡航に関し抱いていた不安とは裏腹、喜ばしい気持ちとなった。

日本とフランスにおけるコロナ禍の状況の違いで最も驚いたことは、日本では未だにほとんどの人が公共の場でマスクを着用しているにも関わらず、フランスではほとんどの人がマスクを着用していないということであった。多数の人がマスクをしていない状況であるため、もちろんマスクをつけている人がマスクをつけていない人に対して冷たい視線を送ることもない。集団、同調圧力による行動制限を全く感じることなく、個々が個々の意思により行動を決めている状況であった。よって、FWOT学会の会場内でも、コロナ禍によるピリついた雰囲気を感じることにはなかった。

Ⅲ. 学会場の様子

学会は Paris Convention Centre (図2) で開催され、会場には複数の口述発表ブース(図3)やポスター発表ブース(図4)、さらにはオンラインポスター発表者のための E-POSTERS ブース(図5)まで準備されていた。会場内は図6や図7からわかるように、世界中の作業療法士で溢れており、常に様々な情報交換、活発なディスカッションが繰り広げられていた。



図2 Paris Convention Centre



図3 会場内口述発表ブース



図4 会場内ポスター発表ブース



図5 会場内 E-POSTERS ブース



図6 会場内の様子1



図7 会場内の様子2

Ⅳ. 学会発表を通して

筆者は今回、“Comparison of cerebral activation between motor execution and motor imagery of self-feeding activity” というテーマのもと、ポスター発表を実施した(図8)。発表内容は近赤外分光法(NIRS)を用いて食事動作の運動実行と運動イメージにおける脳の活性化を比較検討した結果を報告したものであり、基礎研究の内容であったため、“Revolutionary Rehabilitation”というセッションに割り当てられていた。

発表時間、海外の大学教員や作業療法士、学生から、



図8 発表およびディスカッション後の様子

「NIRSを導入したばかりだから使い方を教えてほしい」など、様々なコメントや質問をいただいた。私はニューロサイエンスをベースとしたトランスレーショナルリサーチを中心に研究しているが、今回の発表を通じ多くの作業療法士に関心をもっていただいたことで、これら研究の重要性やニーズを再認識することができた。

V. 時代背景に伴い変化する作業療法

筆者がWFOT学会に参加したのは8年前に横浜で開催された学会以来、二度目である。8年前の学会時とは異なり、今回の学会の演題では人工知能、いわゆるAIやバーチャルリアリティ、機械学習など、テクノロジーの発展を思わせるようなテーマも多数見受けられた。これらは、作業療法がいかにテクノロジーの影響を受けているかを表しているのではないだろうか。

医療は常に流動的で変化し続けている。我々作業療法士は対象者に合ったリハビリテーションの提供を求められるが、時代背景に即した作業療法介入方法の開発や実践もまた重要なことだろう。なぜなら、テクノロジーの発展に伴い、ヒトの生活様式に変化が起これば、そこで生活する対象者に対して提供すべきリハビリテーションも変化するからである。今回の学会のサブテーマにもなっている、“Occupational Revolution”

「作業革命」がいま、まさに我々に求められていることなのかもしれない。今回のハイブリッド型学会の開催が成功に終わったのも、テクノロジー発展の恩恵を受けているからではないだろうか。

VI. おわりに

学会参加の余談として、パーティーの様子を紹介する。学会パーティーはHotel de Villeという、パリの市庁舎で開催された。会場は盛大なホテルのような場所（図9）であり、みなドレスアップをし、立食スタイルでの実施だった。私が8年前に横浜で知り合った海外の作業療法士らとも8年ぶりに再会し、コロナ禍を経ての学会ということもあり、非常に感慨深かった。この8年間で時代は変化し、コロナ禍という未曾有の事態となり、おそらく人生や生活が大きく変化した作業療法士もいるはずだ。

我々は作業療法士という、対象者の想いを汲み取りアプローチする仕事を生業としているが、我々もまたひとりの人間である。このようにヒトと関わり、想いを語り合い、楽しさを共有する場の大切さを改めて感じ、同時にこのような場へ参加する機会をいただけたことに対する感謝の気持ちでいっぱいとなった。

2年後の2024年には、札幌でアジア太平洋作業療法学会（APOTC）が開催される予定である。この頃には日本も偏見なく、広い心をもって海外の作業療法士を国内へ迎え入れることができることを期待したい。



図9 会場パーティーの様子

[引用文献]

- ¹⁾ World Federation of Occupational Therapists. <https://wfotcongress2022.org/>. Access on 8th September.